

## 幼児期の教育と小学校以降の教育の円滑な接続についての一考察

— 小学校低学年の授業実践と幼稚園・小学校教員の意識調査から —

井上麻美子

(山形大学附属小学校)

鈴木貴子

(山形大学大学院教育実践研究科)

A Study on the Smooth Connection Between Education in Early Childhood and Education After Elementary School

— Based on the Lesson Practice in the Lower Grades of Elementary School and the Awareness Survey of Kindergarten and Elementary School Teachers —

Mamiko INOUE Takako SUZUKI

The experience of refining various senses through voluntary play and immersing yourself in activities through repeated trial and error promotes the physical and mental development of children in early childhood. It is important to systematically exchange opinions on " children's growth and learning " so that the qualities and abilities cultivated such as curiosity, inquisitiveness, tenacity, cooperativeness, and sensibility can be demonstrated in education from elementary school onwards.

[キーワード] 幼児教育の質的向上, 幼保小の円滑な接続, 接続期の教育の充実, 目指す子供の姿

### 1 はじめに

平成 29 年に新しい小・中学校学習指導要領が、平成 30 年に新しい高等学校学習指導要領が告示され、全校種において全面実施されている。新しい学習指導要領においては、資質・能力の三つの柱である「知識及び技能の習得」「思考力、判断力、表現力等の育成」「学びに向う力、人間性等の涵養」がバランスよく実現されることが求められている。改訂された幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領、保育所保育指針においても、三つの柱から構成される資質・能力を一体的に育むことが示されており、幼児期から高等学校までの縦のつながりを見通した教育が求められている。

小学校学習指導要領では、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を踏まえた指導を工夫することにより、幼稚園教育要領等に基づく幼児期の教育を通して育まれた資質・能力を踏まえて教育活動を実施し、児童が主体的に自己を発揮しながら学びに向うことが可能となるようにすること。」と示されている。また、「特に、小学校入学当初におい

ては、幼児期において自発的な活動としての遊びを通して育まれてきたことが、各教科等における学習に円滑に接続されるよう、生活科を中心に、合科的・関連的な指導や弾力的な時間割の設定など、指導の工夫や指導計画の作成を行うこと。」とあり、学校段階等間の円滑な接続が重要視されている。円滑な接続を進めるためには、「自発的な活動としての遊び」の中で育まれている幼児期の姿や、幼稚園等で行われている保育の様子等についての共通理解を図ることが重要である。

平成 29 年に改訂された幼稚園教育要領等の中には、幼児期の教育を通して資質・能力が育まれている幼児の具体的な姿として、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が示された。この姿を手掛かりに、幼稚園等と小学校が子供の成長を共有し、幼児期から児童期への発達の流れを理解することを大切にしたい。幼保小接続の取組を見直し、一方が他方に合わせるのではなく、発達の段階を見通してそれぞれの教育活動を充実させ、幼児期の教育を通して育まれた資質・能力を更に伸ばし

ていけるようにすることが重要である。

中央教育審議会(令和3年1月26日)において、「令和の日本型学校教育の構築を目指し全ての子どもたちの可能性を引き出す、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実による、『主体的・対話的で深い学び』の実現」が示された。学びの充実が図られる大きな節目にあって配慮が必要となるのは、全ての子どもが格差なく質の高い学びへ接続できるようにすることであり、幼児教育の質的向上や小学校教育への円滑な接続、接続期の教育の充実を図ることが重要である。令和3年7月、中央教育審議会初等中等教育分科会の下に「幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会」が設置され、全ての子どもに学びや生活の基盤を保障するための方策や、各地域において着実に推進するための体制整備等を中心に審議が行われている。令和4年3月31日に示された「幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会一審議経過報告一」では、目指す方向性として、以下の5点が示された。

- ・「社会に開かれたカリキュラム」の実現に向けた質に関する認識の共有
- ・「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と各園・学校や地域の創意工夫を生かした幼保小の架け橋プログラムの実施
- ・全ての子どもがウエルビーイングを保障するカリキュラムの実現
- ・幼児教育推進体制等の全国展開による、教育の質の保障と専門性の向上
- ・地域における園・小学校の役割の認識と関係機関との連携・協働等

山形県でも、幼保小間の交流や、スタートカリキュラムの実施などの取組が行われているが、形式的な連携にとどまっているという声も聞かれる。子どもに関わる大人が立場の違いを越えて自分事として連携・協働することが一層求められている。

## 2 研究目的及び方法

### (1) 研究の目的

本研究の目的は、幼児教育の質的向上と小学校教育への円滑な接続、接続期における教育の充実を実現するために有効な視点や効果的な取組について明らかにすることである。

### (2) 研究の方法

本研究は、以下の手順で行った。

①小学校低学年における授業実践を取り上げ、時

期や発達段階を踏まえた適切な指導の在り方や、幼児期の教育を通じて身に付けた力を生かした小学校教育への移行についての有効な視点や取組を整理した。

②授業実践の対象児童 33 名に実施したアンケートの結果を分析し、授業実践の考察を行った。

③X 幼稚園の教員 7 名と Y 小学校の教員(低学年担当)6 名を対象に実施した意識調査に基づき、小学校教育への円滑な接続において重要な視点を明らかにした。

④上記①～③を受け、今後の展望をまとめた。

## 3 幼保小接続の視点を大事にした小学校低学年の授業構想

「スタートカリキュラムスタートブック」(国立教育政策所, 2015)では、スタートカリキュラムを「小学校に入学した子どもが、幼稚園・保育所・認定こども園などの遊びや生活を通じた学びと育ちを基礎として、主体的に自己を発揮し、新しい学校生活を創り出していくためのカリキュラム」と示している。「ゼロからのスタートではない」ことを踏まえて、小学校低学年の授業構想において、以下の三つを大切にしたいと考えた。

(1) 子どもの実態や目指す子どもの姿を踏まえた環境の構成

子どもの強みに目を向け、「この学習で目指す子どもの姿」「活動の中で期待する子どもの姿」をもとに、教師が育みたい資質・能力を明確にし、自ら動き出したいくなる環境や見通しをもてる環境を構成することを大切にしたい。

20XX 年 3 月に、Y 小学校への入学予定者が在籍する幼稚園等に以下のような調査を行い、情報を収集した。

- |   |
|---|
| ①子供たちが好きなものや興味関心をもっているものは何ですか。(歌・手遊び・歌遊び・室内遊び・戸外遊び・絵本)          |
| ②年長児クラスで小学校入学に向けて取り組んでいることは何ですか。(運動・文字や数に関すること・給食など食事に関すること・生活) |
| ③子供が好きな遊びを具体的に教えてください。  |

13 の幼稚園・保育所等から回答があり、以下の情報を得ることができた。

- |                                   |
|-----------------------------------|
| 調査項目①の回答から                        |
| ・室内遊びでは鬼ごっこやドッジボール、ごっこ遊びなどが好きである。 |

- ・絵本では「11匹きのねこ」シリーズ、「ぐりとぐら」シリーズなど、動物が主人公である絵本などが好きである。

調査項目②の回答から

- ・かるたやしりとりを通して、言葉に親しませている。
- ・平仮名や数字の読み書きを遊びに取り入れている。
- ・紙芝居を自分より小さい子に読んであげている子もいる。

調査項目③の回答から

- ・鬼ごっこやドッジボール、ごっこ遊びのほか、製作遊びも好きである。

子供たちが興味をもっていることや好きなことは、他者との関わりのある活動が多いことがわかった。経験してきたことを小学校の授業にも積極的に取り入れ、友達と一緒に活動する場を設けることを意識し、幼稚園からの段差を感じることなく学習に取り組めるようにしたいと考えた。

(2) 幼稚園等における教師の働きかけからヒントを得る

子供の成長や学びは切れ目なく続いている。幼稚園教員の働きかけを小学校においても取り入れることが有効だと考え、X幼稚園の「遊びの保育デザイン」に示された「援助のポイント」の以下の部分を参考にした。

- ・一人一人の思いや姿を受け止めた言葉掛け
- ・思いやイメージを引き出す言葉掛け
- ・思ったことやつぶやいたことを周りの友達とつなぐ言葉掛け
- ・互いの思いを出し、教え合ったり認め合ったりしながら遊びをすすめていこうとする姿への共感や見守り、後押し
- ・自分たちで考え、問題を解決しようとする姿の見守りと価値付け

(3) 子供自身がこだわりをもって進める学習活動  
教師主導の誘導的な学習ではなく、子供主体の学習にするために、以下のことを大切にしたい。

- ・一人一人の思いや願いを尊重する。
- ・最終的なゴールを教師と子供が共有する。
- ・自分なりのこだわりや根拠をもって進めるようにする。
- ・ゴールに向かう過程における、子供の自己選択・自己決定・自己評価を重視する。

#### 4 授業実践の結果及び考察

##### ◆授業実践その1

(1) 授業の対象者・実施期間

対象者：Y小学校1年生34名

(14の幼稚園・保育所等から入学)

実施期間：20XX年6月14日(木)～6月25日(月)

(2) 単元について

【単元名】えほんだいすき!

～わたしのおきにいり しょうかいします～

【単元の目標】

絵本に触れ、登場人物や場面、言葉などに着目してお気に入りを探し、友達と伝え合う楽しさを味わい、「絵本大好き」と感じることができる。

【単元設定の意図と手立て】

本単元では、学ぶ楽しさを実感できる学習展開にしたいと考え、以下の手立てをとった。

① 経験を生かして主体的に学ぶ環境の設定

絵本を読むことは、子供たちにとって楽しい活動であり、遊びの一つでもある。「遊び」の延長に教科学習を設定し、慣れ親しんだ本や魅力的な本を自由に手に取ることができる環境を整えた。自然な交流が生まれるように、ホール中央に、「絵本を読んで、互いのお気に入りを紹介する」というコーナーを設置した。

② 自由度のある学習活動の設定

本単元は、これまでの遊びや学びの経験を生かし、自分の思いや願いをもとに、子供が自ら学習活動を選ぶようにした。取り組む活動を自分で決め、適宜他の活動に移動できるようにした。活動名を示したボードにネームを貼り、意思表示を行うことで迷っている子供も動き出せると考えた。幼稚園では登園してすぐに遊びたくなる環境の工夫があり、「遊び出し」につながっている。この経験を踏まえ、活動の途中で、友達や活動の様子をボードで確認できるようにすることで、主体的に活動を選択する姿につながると考えた。

(3) 実際の子どもの姿

【場の設定】

机・椅子のない、じゅうたん敷きのホールで学習活動を行った。自由に動くことができる環境の中で居場所を見つけ、各自が選んだ活動に取り組む姿が見られた。また、友達とお気に入りを伝え合う「みてみてコーナー」では、お話の内容を質問したり、お気に入りの理由を伝え合ったりする自然な関わりが見られた。

### 【多様な絵本を手にとることができる環境】

「読んだことがあるから。」「友達に薦められたから。」「初見だが気になるから。」と、それぞれの意図で本を選び、じっくり絵本を読む姿が見られた。また、音読する友達に寄り添い、聞きながら一緒に読む姿も見られた。

### 【馴染みのある道具による表現】

好きな場面の絵や言葉を、大きな紙面に自由に表現させた。クレヨンや鉛筆は馴染みのある道具であり、ノートに鉛筆で書く感覚とは違い、絵や字の大きさを自由に調整しながら表現する姿が見られた。

### 【活動の可視化】

自分で活動を選択したことで、興味・関心を生かして活動する姿が見られた。30分近く書く活動に取り組める子供もいれば、10分ごとに活動を変える子供もおり、個別最適な学びの姿につながった。飽きて活動を離れてしまう子供はいなかった。

### 【子供同士をつなげる支援】

一人一人の思いを尊重し、思いやイメージを引き出す言葉掛けを意識した結果、日常会話のように思いを自分の言葉で自由に話す姿が見られた。また、子供同士をつなぐ言葉掛けにより、自分の考えを見直したり、広げたりする姿も見られた。

## ◆授業実践その2

### (1) 授業の対象者・実施期間

対象者：Y小学校2年生33名

実施期間：20XX年5月27日(金)～6月17日(月)

### (2) 単元について

#### 【単元名】

この文しょう、〇〇をしりたい人におすすめです  
～説明の仕方に目を向けて読む～

#### 【教材名】『サツマイモのそだて方』（東京書籍）

#### 【単元の目標】

野菜や花、生き物について、事柄や説明の仕方に着目して読み、どんな時に役立つ情報なのかを考えて、必要な情報を選ぶことができる。

#### 【単元設定の意図と手立て】

本単元の教材は、二つの文章で構成されている。一つ目の文章は、時間の順序に沿ってサツマイモの栽培の仕方について述べたもので、二つ目の文章は、サツマイモを大きくたくさん育てるためのポイントをナンバリングして述べたものである。

第一次の学習では、目的や用途によって書かれる事柄や説明の仕方に違いがあることに気付かせたいと考え、それぞれの文章はどんな人が読むの

にふさわしいのか、どういう人におすすめなのかという視点から、二つの文章を比べて読んだ。

第二次の学習では、『サツマイモのそだて方』を読んで学んだことをもとに、実際の図鑑や本を読む学習活動を設定した。さまざまな図鑑や本の中から、〇〇を知りたい人におすすめの文章（ページ）を探し、「この文章は～だから、〇〇を知りたい人におすすめです」と、選んだ理由を添えて紹介することで、目的と情報の関係を捉えたり、情報に合った表し方に気付いたりできると考えた。

子供たちが、「役に立つ文章の紹介をしたい」という思いや願いをもち、主体的に問題解決を進めることができるよう、以下の手立てをとった。

#### ①調べる対象の自己選択・自己決定

第二次の学習では、調べる対象を6種類の野菜や花、生き物とし、対象を自分たちで決めるようにした。さらに、同じ対象を調べるグループ内でも、自分の調べる目的を明確にし、見通しを持って学習を進められるようにした。

#### ②自由に情報収集する場の設定

調べ学習の対象に関わる本をグループで集め、どんな人におすすめする情報かを明確にした情報の収集・整理を行った。グループの形態で自由に話せるようにし、自分のこだわりをもとに情報を選び、比較できるようにした。

#### (3) 実際の子どもの姿

#### 【調べる対象の自己選択・自己決定】

「生活科でトマトを育てているから。」「ダンゴムシは学校や公園で捕まえることができるから。」と、学習や生活の経験をもとに話し合いをした結果、調べる対象を「トマト」「とうもろこし」「あさがお」「ザリガニ」「ダンゴムシ」「カブトムシ」の6種類にし、その中から自分が調べたいものと自分が調べたいこと（種類、育て方、見つけ方等）を決めた。子供たちは、「私はトマトの種類を知りたい人におすすめの文章（ページ）を探す。」「ぼくはザリガニの育て方を知りたい人におすすめの文章（ページ）を探す。」というように、何についての情報を探すのかを明確にしていた。

#### 【学習過程とゴールの自覚】

「さがす・読む」「くらべる」「えらぶ」「りゆうを書く」と、端的な言葉で提示した。この4つに順序性はなく、「読んでは比べ、また別の図鑑を読む」「情報を選んでから、再度比べて検討する」など、各々が判断して活動する姿が見られた。

【自分なりのこだわりや根拠】

同じグループでも、目的によって探す情報が異なるため、自分が求める情報を黙々と探す姿や、「この文章、どう思う？」と友達に相談しながら探す姿があった。種類を調べている子供が「これ育て方に合うんじゃない？」と友達に薦めたり、関係する本がないかを他のグループに尋ねたりする様子も見られた。一人一人がこだわりや根拠をもって、おすすめの文章を決めることができた。

(4) 授業実践の対象者に行った調査結果より

Y 小学校の 2 年生の子供たちが、成長や更なる可能性をどのように自覚しているかを調査した。三つの質問項目に対して自由記述で答えるものとした。調査の結果を「学習場面にかかわるもの」と「生活場面にかかわるもの」に分類し、表 1 のようにまとめた。

◆授業実践その 1 についての考察

小学校では、一人一人の机と椅子がある教室、教科書やノート、鉛筆や消しゴムといった学習用具など、幼稚園等とは異なる環境の中で生活することになる。入学当初は、幼稚園等の環境構成や工夫を積極的に取り入れ、自発的な遊びの延長として学ぶことができるようにすることが大事だと感じた。また、毎時間の終わりに「今日はどんなことが楽しかったかな。」と問いかけた際に、絵本の題名や友達の名前が出てきたことから、経験のある絵本や友達との関わりが、子供たちの学ぶ楽しさや意欲につながったと感じた。

◆授業実践その 2 についての考察

授業後に、以下のような振り返りがあった。

- ぼくはおすすめのページを見つけるのが難しかったです。なぜかという、いろいろな本のページを一つ一つ見ていくからです。でも、本を読んでいいページを見つけたとき、その瞬間いい気持ちになりました。(A 児)
- トウモロコシの種類を知りたい人におすすめするために、「世界のトウモロコシ」とあったので、世界のことまで知ることができるいいページだと思いました。友達にも「いいね。」と言われてうれしかったし、「これでよし。」と思えました。(B 児)
- わたしはこの学習をして、本を読むことが大切だとわかりました。今まではパラパラ読んでいたけれど、ちゃんと読んでみたらいろいろなことが書いてあって、いろいろな発見ができるからです。(C 児)

A 児の言葉からは試行錯誤しながら納得できる情報を探し出せたことが、B 児の言葉からは友達との対話を通して見つけた情報に納得感がもてたことが、C 児の言葉からは学習したことを今後に生かそうとしていることがわかる。表 1 を見ると、「幼稚園のころの経験を、小学校でどんなときに使っているか。役立てているか。」「先生の力を借りないで、自分で(自分たちで)できたことはどんなことか。」という質問に対して、対象児童は生活場面に関わることを多く挙げており、生活場面

表 1 Y 小学校 2 年生 33 名に行った調査の結果

質問項目	場面	学習場面にかかわるもの	生活場面にかかわるもの
1 幼稚園のころの経験を、小学校でどんなときに使っていますか。どんなときに役立てていますか。		<ul style="list-style-type: none"> <li>• 鬼ごっこの鬼から逃げるとき。(5)</li> <li>• 走るとき (2)</li> <li>• サッカー</li> <li>• 園工のとき (4)</li> <li>• はさみの使い方</li> <li>• 鉛筆の持ち方</li> <li>• わからないことがあったら本で調べる。</li> <li>• 避難訓練</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 遊び時間の遊び</li> <li>• お皿の置き方</li> <li>• トイレの使い方</li> <li>• 廊下を走らないこと</li> <li>• 幼稚園のころから優しくしていたから、小学校でも使っている。(3)</li> <li>• 1 年生と話すとき、幼稚園の小さいころに話されたことを役立てている。</li> <li>• 幼稚園の先生の「勇気を出せば何でもできる」という言葉が悲しいとき役立っている。</li> </ul>
2 先生のを借りないで、自分で(あるいは自分たちで)できたことはどんなことですか。		<ul style="list-style-type: none"> <li>• 体育で試合をするときに子どもたちが審判をしている。</li> <li>• 体育の準備体操 (2)</li> <li>• うんていや登り棒 (2)</li> <li>• ものを作ること</li> <li>• 友達とすごいものをつくること。</li> <li>• カッターナイフを使う。</li> <li>• テストや勉強 (2)</li> <li>• 自習 (4)</li> <li>• 先生がいないとき静かにしている。(3)</li> <li>• どうしたらいいか考えること</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 朝の会や帰りの会を速める。(2)</li> <li>• 整理すること (2)</li> <li>• 机運び</li> <li>• 友達がけがをしたときに助けた。</li> <li>• けがをしても立ち上がる。</li> <li>• 棚の上のものを自分でとれるようになった。</li> <li>• けんかをやめること</li> <li>• 電気をあまり使わないこと</li> <li>• おもらしをしないようにトイレに行くこと</li> <li>• どうしたらいいか考えること</li> <li>• バス停での持ち方</li> <li>• 新しい遊びを考えること</li> </ul>
3 先生のを借りないで、自分で(あるいは自分たちで)こんなことができそうかどうかということはありませんか。		<ul style="list-style-type: none"> <li>• 自習 (4)</li> <li>• 先生がなくても静かにできそう。(3)</li> <li>• 自習のときに役割を決めて活動すること</li> <li>• サッカーの試合</li> <li>• 算数の問題集</li> <li>• 料理 (2)</li> <li>• 時計を見て授業の準備をすること</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 遊ぶこと</li> <li>• 給食の準備 (2)</li> <li>• 学校全体をクラスのみみんなでそうじすること。</li> <li>• 整理整頓 (2)</li> <li>• ほかの学年を楽しませること (2)</li> <li>• 役割分担を決めること</li> <li>• アイデアを出すこと</li> </ul>

において、教師が「幼稚園・保育所等での経験を発揮させよう」「自分でできることはさせてみよう」と意識して関わっていることが影響していると思われる。「先生の力を借りないで、自分で（自分たちで）できそうなことはあるか。」という質問に対する回答では、「自習」や「勉強」という教室での学習をイメージした回答が多かった。「自習のときに役割を決めて活動すること」「算数の問題集」「料理」「時計を見て授業の準備をすること」など、目的やゴールに向かう過程を自分で考えたり決めたりしながら活動することについての回答が多かった。子供たちは、「学びを自分で創っていくことができそう。」「自分で進める学習をもっとやってみたい。」と感じ、「自分たちで創り上げる学習」を望んでいると思われる。経験をもとに自分の力を発揮できる場面や、子供自身が自己選択・自己決定を行うことができる場面を大切に授業を構想することが重要であると感じた。

## 5 接続期の教育に関する実態と課題

### (1) 意識調査の結果と考察

X 幼稚園の教員 7 名と Y 小学校の教員（低学年担任）6 名を対象に、意識調査を実施した。

調査期間：20XX 年 12 月 1 日～12 月 23 日

【意識調査の項目：幼稚園のみの項目】

- ・小学校での学習や生活を見据えて育みたい力

【意識調査の項目：小学校のみの項目】

- ・小学校に入学する前に身に付けてほしい力
- ・入学後、児童の支援や指導の際に意識したこと

【意識調査の項目：共通項目】

- ・貴園（貴校）で行っている学びの方法
- ・貴園（貴校）で行っている取組
- ・今担任しているお子さんについて気になること
- ・「就学前の教育と小学校教育の段差」で、子供への影響が大きいと思われるもの
- ・「幼児期の終わりまでに育ててほしい 10 の姿」で、日常の中で特に意識しているもの
- ・幼稚園と小学校の間で行われている連携
- ・連携・接続で特に大切にしたいこと
- ・交流の時期や回数、内容についての希望
- ・小学校教育への接続を意識して行っている活動や指導の工夫
- ・子供たちの状況を把握する手がかり

幼稚園の教員が回答した「小学校での学習や生活を見据えて育みたい力」は、以下の通りであった。

- ・いろいろな友達の考えに気づいたり、思いを伝え合ったりする力
- ・自分の思いをしっかりと伝える力
- ・思いを人に伝える力
- ・保育者や友達の話をしっかりと聞く力
- ・興味や関心を広げ、関わろうとする力
- ・自ら遊びを見つけ、活動する力や意欲
- ・協同的に取り組む力
- ・自分で考えてやってみようとする力
- ・自ら考え、行動できる力

小学校の教員が回答した「小学校に入学する前に身に付けてほしい力」は、以下の通りであった。

- ・自分の思いを表現する力
- ・コミュニケーションを適切に、楽しく取ることができる力
- ・話をしっかりと聞く力
- ・様々な事象に興味や関心を持つことができる力
- ・自分がしたい遊びに打ち込み、表現する力
- ・人と関わる楽しさや自然と触れ合うよさを感じる力
- ・身のまわりのことを自立してできる力
- ・身のまわりの整頓や身支度などができる力
- ・着替えやトイレなど自分のことは自分でする力

表現は異なるものの、以下の 6 つの力について、双方が回答した。

- ・思いを伝える・表現する力
- ・話を聞く力
- ・興味・関心を持つ力
- ・自ら見出した遊びに打ち込む・活動する力
- ・他者と関わる力
- ・自分で考え行動する力

幼稚園の教員は「思いを伝える・表現する力」について、小学校の教員は「自分で考え行動する力」についての回答が多かった。

「就学前の教育と小学校教育の段差で子供への影響が大きいと思われるもの」についての回答状況は、表 2 のとおりである。

ア、イ、ウを選択した教員は幼稚園と小学校の双方で過半数であり、子供の実態把握について共通理解が図られていると感じる。力を選択した教員はほとんどおらず、小学校の教員は 0 であった。

「ゼロからのスタートではない」ことについての共通理解が進んでいると捉えることができる。



一方、エとオについては、双方の回答に異なる傾向が見られた。エを選択したのは幼稚園のみであり、オを選択したのは、幼稚園の3割弱に対して小学校は8割強であった。このことから、小学校教員は、子供にとっての段差を、人的環境よりも学習環境として捉えていることがわかる。実際、小学校では、生活科の授業などで学習環境に対する配慮がなされている。低いテーブルが置かれた大きいホールを活動場所とし、他者との関わりを自発的に行うことができる環境を整備し、幼稚園等での経験を生かした自発的な関わりが生まれやすいようにしている。前述した授業実践でも、意図的な環境整備により、自分の居場所を見つけ、活動を自己選択する子供の姿が確認された。

段差は、少なくしたり、無くしたりすることがよいのではなく、子供たちの成長にとって必要なものと、教師の配慮により負担を軽減するのが望ましいものを見極め、指導にあたるのが大事である。幼稚園と小学校の双方が共通理解を図り、段差を滑らかにすることで、子供たちの成長や発達をより一層促すことができるようにしたい。

「今担任しているお子さんの気になること」についての調査結果は、表3のとおりである。

アを選択した教員は、幼稚園の3割弱に対して小学校は8割強であった。双方が育みたい力として回答している「話を聞く力」については、年齢が上の小学校の方がアを選択している教員の割合が高い。全体の話を聞く場面の環境的な差異が影

表2 就学前の教育と小学校教育の段差で子供への影響が大きいと思われるもの（3つ選択）

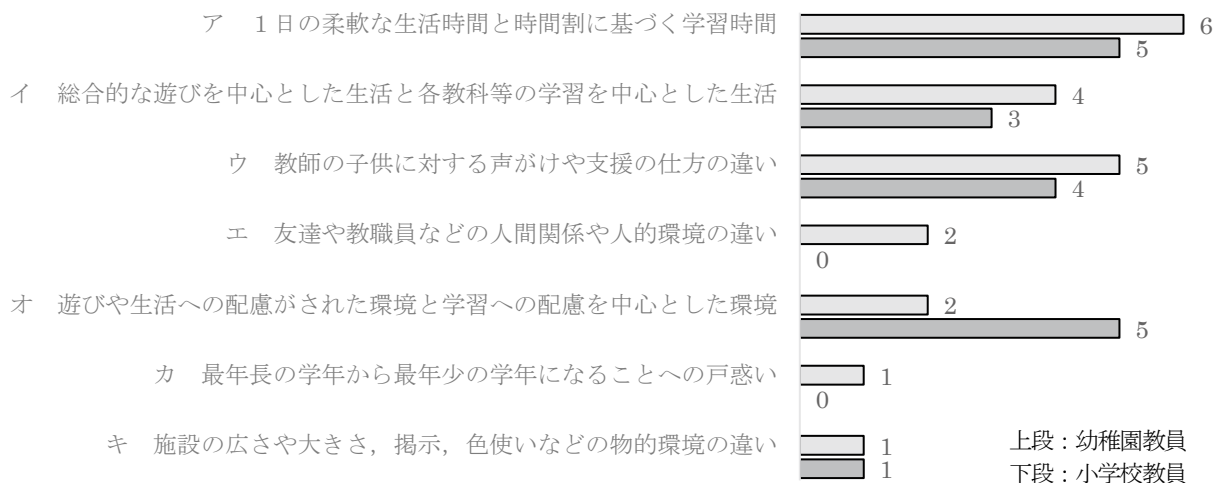
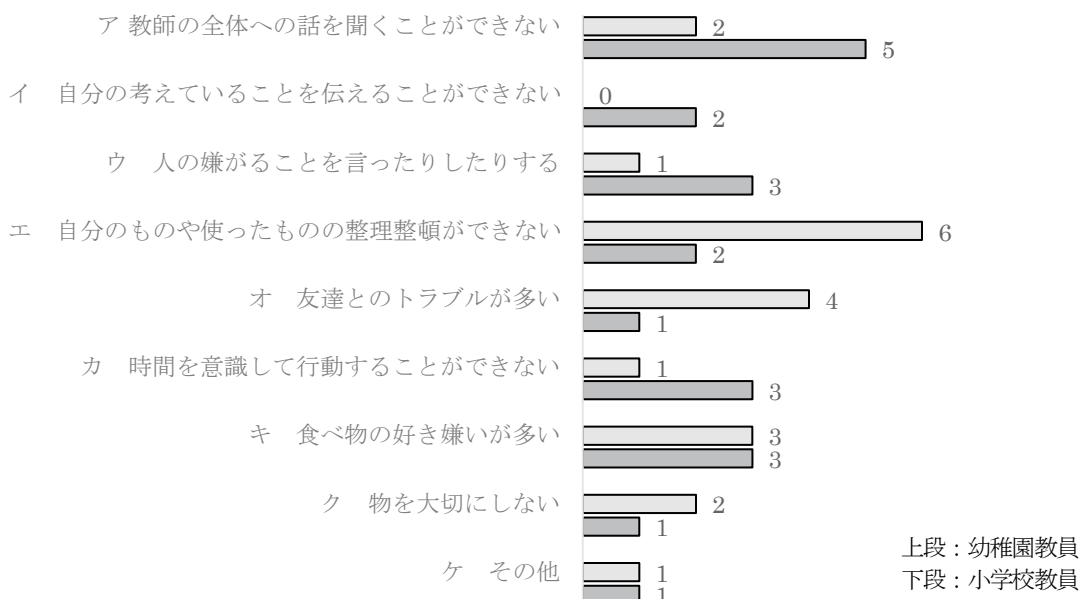


表3 今担任しているお子さんの気になること（複数回答）



響していると推測する。小学校の教員に追加質問を行ったところ、教室後方の子供の聞き方が気になることが多いという回答を得た。後方の子供は、教師と距離が離れている状況で話を聞いている。接続期においては、安心して話を聞くことができる場の設定や環境整備への配慮が必要であり、子供を主体とした環境のデザインが求められている。

イを選択した教員は、幼稚園の0に対して小学校は3割強であった。イを選択した教員は、「入学後、児童の支援や指導の際に意識したこと」について、「短い言葉で話す」「視覚的にわかりやすく提示する」「指示を出すときは板書をセットで行い、立ち返れるようにする」など、子供への伝え方や情報の示し方について挙げていた。一方、イを選択していない教員は、「子供の思いを聞く」「子供同士の話をつなぐ」「過去の経験を聞いてみる」など、指示や説明よりも子供の話を聞くことを大事にしていた。子供の声に耳を傾けようとする姿勢を大事にすることで、子供たちは思いを表出しやすくなり、コミュニケーション能力の向上にもつながると考えられる。教師が「聞く」ことを大事にして子供に関わることは、接続期の教育において重要な意味を持つことが明らかになった。

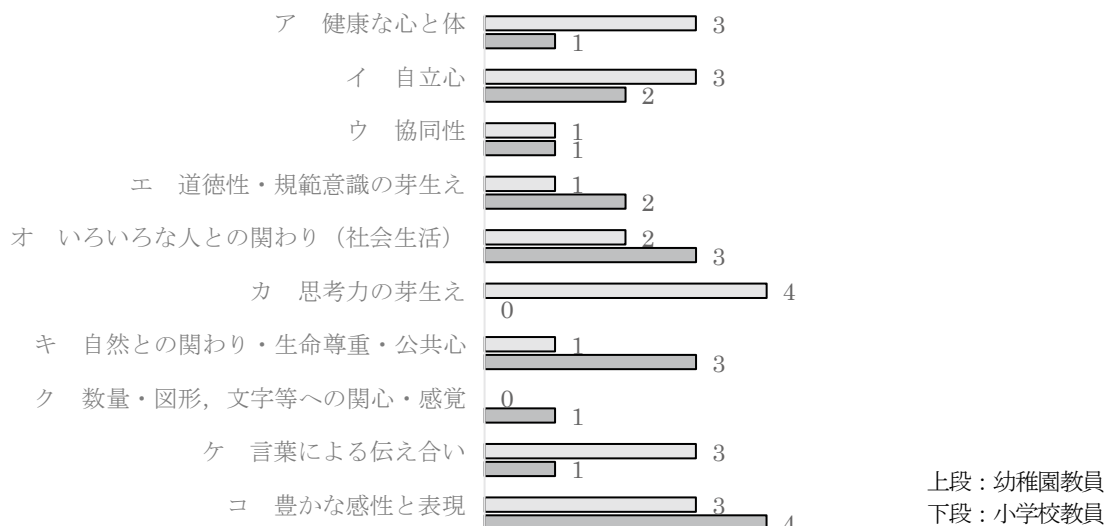
表4は、「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」についての調査結果である。カを選択した教員の割合が興味深い。幼稚園では6割弱が選択しているが、小学校では0である。子供たちは、身近な環境に関わる中で問いを持ち、探究し、物事の仕組みに関心が向かう中で思考力が芽生え、試行錯誤を繰り返していく。自分との対話、友達

や先生との対話を通して自分の考えをよりよいものにしようとすることは、幼児期から高等学校までの縦のつながりを見通した教育において重要である。探究的な学びにおいて重要なこの姿を、小学校の教員が選択しなかったのはなぜなのか。

小学校の教員が最も多く選択した姿はコであり、幼稚園の教員も4割強が選択した。上手に表現できるかどうかではなく、表現することを楽しみ、感じたことを自分なりに表そうとする姿が大事であり、表現時の子供の喜びや工夫を受け止めて伝えたり、表現する過程の楽しさや大切さを感じられるよう工夫したりする教師の関わりが重要である。コの姿は、自発的な遊びにおいてはもちろん、教科等の学習場面において期待される姿であるため、小学校の教員はコを選択したと推測する。

カとコで期待される子供の姿に差異はあるが、双方の教員が、子供自身が試行錯誤する過程を大事にしていることが明らかになった。自発的な遊びを中心にする幼稚園では環境の領域での配慮が、学習が中心となる小学校では表現の領域での配慮が重要視されている。「貴園（貴校）で行っている学びの方法」についての調査で、幼稚園の全教員が選択したのは「園児一人一人が興味ある遊びにじっくり取り組む中で自ら学びを得る自由遊び」であり、小学校の全教員が選択したのは「児童の学びに教師が気付きを与えるなど発展させる活動」であったことから、一方が他方に合わせるのではなく、発達の段階を見通した教育活動の充実が重要であることが確認できた。

表4 「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」について日常の中で特に意識しているもの（3つ選択）





その一方で、幼稚園と小学校の教員が思い描いている姿や見え方が異なっている可能性もある。幼児期における主体的・対話的で深い学びを実現する際に重要な「思考力の芽生え」を、小学校の教員はどのように捉えたのだろうか。幼稚園と小学校では、子供の生活や教育方法が異なり、イメージする子供の姿に違いが生じるのは自然なことである。だからこそ、双方の教員が話し合い、目指す子供の姿を明確にしていくことに価値がある。特に、架け橋期においては、共通の願いのもとに適切な教育を提供するために、期待する子供の姿を具体的に共有することを大切にしたい。

「幼稚園と小学校の連携・接続で特に大切にしたいこと」の回答状況は、以下のとおりである。

**【幼稚園】**

- ・一人一人の個性や成長についての共有
- ・「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」をもとにした子供の育ちを伝えること
- ・特別な支援を必要とする子供への配慮事項
- ・小学校で子供の伸びを援助するための引継ぎ
- ・安心して生活や学習ができる場や時間の保障
- ・遊びから学びにつながる環境
- ・幼児教育と小学校教育の特徴の相互理解
- ・教員が思いを伝え合い、共通理解を図ること

**【小学校】**

- ・一人一人の子どもの特性や強みの引継ぎ
- ・幼稚園で経験してきたことを知ること
- ・幼稚園で経験してきた遊び
- ・幼稚園で大事にしていることと小学校で大事にしていることの相互理解
- ・入学時に配慮すべきことの引継ぎ
- ・保護者の様子やトラブルなどの引継ぎ
- ・子供の思いに寄り添うこと
- ・小学校生活の見通しと希望を持てるようにすること

幼稚園では、小学校での学習や生活を見据えて、「年長児はグループ活動や係活動をはじめる」「自分でやりたいことを見つけてやろうとする姿を大切にしたい遊びを充実させる」「友達と思いを伝え合い、相談しながら目的に向かって活動をつくり出す」などの取組を行っている。また、小学校では、ゼロからのスタートとならないように、「幼稚園での経験をベースにした指導を行う」「授業時間を弾力的に扱う」「子供同士が自然につながるような活動を取り入れる」「子供たちの気づきや初発の感想

から授業を構想する」「自由に使うことのできる物や場を整える」などの取組を行っている。

幼稚園の回答には、子供の姿を具体的に共有することを大切にしたいという思いがより表れている。特に、「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」をもとにした子供の育ち、すなわち、目指す姿の具体的な共有については、小学校の回答にはない。小学校の教員は、実態把握や支援の方法についての情報に重きを置いている傾向があり、ここに意識のずれを感じた。

希望する交流の回数や内容についても、幼稚園と小学校には差異が認められた。幼稚園の教員は3~5回、小学校の教員は2~3回の交流回数を希望する者が多く、幼稚園の教員の方が多くの交流を望んでいる。また、希望する交流の内容として、「何が子供にとって必要なことかを出し合うことから始め、具体化していく」ことを挙げたのは、幼稚園の教員だけである。幼小の接続においては、双方の教員が「幼児期における自発的な活動としての遊び」を理解し、子供の育ちと学びについて意見交換することを大事にしたい。目指す姿を具体的に共有し、思いや考えを出し合う機会を、年間を通して計画的に設定することが必要である。

**(2) 課題と今後の展望**

スタートカリキュラムは「6年間の学びの基礎」であり、5歳児から小学校1年生の2年間（いわゆる「架け橋期」）は、生涯にわたる学びや生活の基盤をつくる重要な時期である。

三浦（2020）は、「子どもたちの『遊びこむ』姿に、私たちは『学び』につながる要素を発見することができる。また、充実した『学び』の中に『遊び』の要素を発見することもできそうである。『遊び』という感覚を、保育から小学校や中学校の教育活動に広げていく発想が有効である。とりわけ『探究型学習』のように、自らの興味関心を出発点として、自分の考えを創出したり新たな発見をしたりする活動においては、『遊び』の感覚が大切だ。」と述べている。幼児期から、子供たちは様々な場面で主体的に周囲への興味を持ち、直接関わろうとする。このような「学びの芽生え」は、生涯の学びの出発点となる。小学校以降の教育に携わる教員が、「学びの芽生え」や「後伸びする力」を培う幼児期の教育について理解を深め、学校段階等間の円滑な接続が実現することを期待したい。

また、藤岡（2019）は、「子どもが新たな知識を

得ることが、対象との関わりを変化(深化, 分化)させ、新たな遊び課題の生成につながる可能性は、様々な事例に見出すことが出来ると思います。ただ、言うまでもなく、子どもが必要としないのに与えられる知識は、遊びには生かされません。また、疑問に対して常に簡単に答えが与えられてしまうと、子どもの主体的な取り組みの機会が損なわれることとなります。」と述べている。幼児期の遊びの中にある学びを読み解くことは、学びの連続性の視点から子供にとって必要な支援を見極めることにつながる。幼児期の遊びや生活を通した総合的な学びが小学校において発揮できるように、また、子供の思いや願いをきっかけとして始まる学びが教科等の学習につながっていくように、小学校低学年で、合科的・関連的な指導の工夫が積極的に行われることにも期待したい。

さらに、山形県教育庁義務教育課作成の幼小リーフレット「つなぐ」で、「教職員同士で『遊びの中で何が育っているのか』と具体的な姿を共有し、子供の資質・能力をつなぐためのカリキュラムを協働的に編成していくことが大切だ」と示されていることに注目する。多くの小学校で、スタートカリキュラムが、小学校への適応指導が中心のものになっている実態がある。学びや育ちの連続性という視点に基づく、資質・能力をつなぐためのカリキュラム編成に向けた取組を組織全体で行っていくことが課題である。全ての教員が関わるプロセスや、組織的な体制づくりを大切に、幼保小接続の取組を年間計画に位置付け、持続的・発展的なものにしていくことが肝要である。

## 6 おわりに

本稿では、幼児教育の質的向上と小学校教育への円滑な接続、接続期における教育の充実を実現するために有効な視点や効果的な取組について、小学校低学年の授業実践と、幼稚園・小学校教員を対象にした意識調査に基づいて考究した。

授業実践からは、学びの連続性の視点に立った環境の構成や教師の関わり、子供の思いや願いを大切に学習活動の設定が有効であり、子供たちの達成感や満足感につながる事が確認できた。また、対象児童への調査結果から、生活場面と学習場面の両方において、ゴールに向かう過程を、自分たちで考えて進めたいと感じている子供が多いことが明らかになり、経験をもとに自分の力を

発揮し、自己選択・自己決定を行うことができる場面の設定が有効だとわかった。

幼稚園と小学校の教員を対象にした意識調査からは、目指す子供の姿の具体的な共有、教員が組織的・協働的に学び合う機会の充実が、幼保小の接続において極めて重要であることが確認できた。ただし、全ての教員が必要感を持っているわけではないため、資質・能力をつなぐためのカリキュラム編成を組織的に行う体制づくりを進めることが、教員一人一人の意識に変化をもたらすのではないかという結論に至った。

本稿で取り上げた授業実践や意識調査は、一部の子供や教員を対象としたものであり、複数の園・学校の教員を対象にした調査を丁寧に行うことや、幼稚園等における実践の視点からも検討を加える必要がある。保護者や社会との連携の在り方について考察を加えることも、今後の課題としたい。

## 引用・参考文献

- 文部科学省 (2018) 幼稚園教育要領
- 文部科学省 (2018) 幼稚園教育要領解説 株式会社フレーベル館
- 文部科学省 (2018) 小学校学習指導要領
- 文部科学省 (2018) 小学校学習指導要領解説総則編
- 国立教育政策所(2015)「スタートカリキュラムスタートブック」
- 文部科学省 (2022)「幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引き (初版)」
- 無藤隆 (2017)『幼稚園教育要領ハンドブック』株式会社 学研教育みらい
- 山形大学附属幼稚園 (2018)『遊びこむ子どもを育む』
- 山形大学附属幼稚園 (2019)『遊びこむ子どもを育む vol. 2』
- 山形大学附属幼稚園 (2018)『遊びこむ子どもを育む vol. 3』
- 三浦登志一(2020)「『遊びの中の学び』と『学びの中の遊び』」、『山形大学附属幼稚園 遊びこむ子どもを育む vol. 3』, p. 61
- 藤岡久美子(2019)「遊び課題の生成に保育者はどのようにかわるか」、『山形大学附属幼稚園 遊びこむ子どもを育む vol. 2』, p. 83
- 山形県教育庁義務教育課(2022)「幼小リーフレット『つなぐ』」